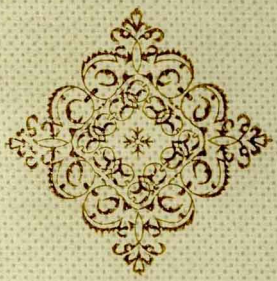

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

28

フォースター

天使も踏むを恐れ　荒 正人訳

ハワーズ・エンド　小池 滋訳

中央公論社

新集 世界の文学 28 ©1970

フォースター

訳者 荒 正人
小池 滋

昭和45年10月25日初版印刷
昭和45年11月 5 日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

静かなドン　Ⅱ　3

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

静かなドン　Ⅱ

おお、栄えある静かなドンよ、
われらを育ててくれた父、ドン・イワノヴィチよ、
おまえは栄誉につつまれ、
おまえを讃える言葉はその数を知らぬ、
ドンよ、いつでも、おまえの流れは早く、
その水は、いつでも清く澄んでいた、
それなのに、いま、ドンよ、おまえは黄色く濁り、
すさまじい濁流となって水を運んでいる、
栄えある静かなドンは答える。
「どうして濁らずにいられよう、
わが子、美しい若者たち、
美しい鷹、ドン・コサックを失ったのだから。
コサックを失ったいま、わたしの険しい岸辺は洗い崩され、
浅瀬の黄色い砂が河に流れ、水をかき濁すのだから」

古代コサック民謡

第二巻

第四部（つづき）

一五

六月の戦火にさらされて完全に廃墟と化した小さな町から一キロほど離れた林のそばに、ジグザグの塹壕線が奇怪な形に曲がりくねってつづいていた。その林のはずれのあたりをコサック特別中隊が占めていた。

塹壕線の背後の榛の木や白樺の若木が鬱蒼と生い茂る林のかげに、いつのことだったか、まだ戦争のはじまる前に掘り起こされたことのある泥炭の沼が赤錆びて見え、野ばらが愉しげに赤い実をつけていた。右手に見える、岬のように突き出た林の向こうに、砲弾で爆破された街道が一本、まるで前人未踏の道のごとく延びていたが、林のはずれには、弾丸の跡をとどめたひょろ長いブリヤン草が生い茂り、焼け焦げた木株がうずくまり、胸墻の褐色の粘土が黄色に見え、そして土肌を見せていた野の上を、皺を刻みこんだようになって塹壕が遠く四方に走っていた。うしろのほうでは、あちらこちらを掘り返された沼や破壊された街道までも、生活の匂い、注ぎこまれた労働の匂いをただよわせていたが、しかし林のはずれの大地は、喜びのない悲しげな光景を人々の目にさらしていた。

この日、かつてモホフ製粉所の製粉工であったイワン・アレクセエヴィチは、第一種輜重隊が駐屯していた近くの町まで出かけて行き、夕方ごろになってやっともどってきた。自分の掩蔽壕に向かって歩いて行く途中で、彼はザハール・コロリョフとばったり出会った。積み上げた砂袋のくぼみに長剣をひっかけ、意味もなく両手を振りまわしながら、ザハールはほとんど駆けださんばかりにして急ぎ足で歩いてきた。イワン・アレクセエヴィチは脇に身をよけて道をあけたが、しかしザハールは、彼の軍服のボタンをつかみ、不健康そうに黄色く濁った目をくりくりさせながら囁いた。

「おい、聞いたか？　右翼の歩兵が退却しはじめているんだ！　戦線を放棄するつもりじゃねえかな？」

さながら黒い鋳鉄を熔かしたような、そしてまた凍てついた流れのようにじっと動かぬザハールの顎ひげは、すさまじいまでにもつれ、その目は、満たされぬ渇望に

煩悶する光を宿していた。
「どういうわけで戦線を放棄するんだ？」
「とにかく退却しているんだ、どういうわけだか、おれは知らんよ」
「交代じゃねえのか？　小隊長のところに行って、聞いてみようじゃねえか」
ザハールはくるりと向きを変えると、つるつる滑る湿った地面に足をとられながら、小隊長の壕舎のほうに歩いて行った。
それから一時間後、中隊は歩兵と交代して町に向かった。そして翌朝、馬匹係兵から馬を受けとり、強行軍で後方に移動して行った。
細かい雨がばらついていた。白樺が頭を垂れて背をかがめている。道が林のなかにさしかかると、馬どもは、湿気と、昨年の落葉のひからびたような、もの悲しい鋭い匂いとを嗅ぎつけて鼻息を吐き、これまでよりも活気づいて嬉しそうに足を速めた。茂みには、つくばね草がばら色の南京玉のようになって濡れ、雨に洗われたつめ草の泡のような帽子はまばゆいばかりに白く輝いている。風が木々を揺すり、馬にまたがった兵士たちの上に大粒のしずくをはらい落とした。外套と帽子は、まるで霰弾でも打ち抜かれたみたいに、黒い斑点を作った。安たばこの煙がしだいに薄らぎながら小隊の隊列の上を流れていた。
「いきなり引っぱり出しておいて、どこへ連れて行こうというのだかわかりやしない」
「なにを言ってる、おまえは塹壕のなかはもううんざりだなどとぬかしていたくせに」
「それにしても、ほんとうの話、どこに連れて行く気なんだろうな？」
「編成替えだろう」
「それにしちゃ、どうもようすがおかしい」
「おうい、みんな、せめてたばこでも一服やって、心の憂さを晴らそうじゃねえか！」
「ところが、おれの心の憂さというやつは、どこまでもついてきやがるんでな……」
「一等大尉殿、歌ってもよろしいでしょうか？」
「いいって言ったじゃないか……歌えよ、アルヒープ！」
前のほうにいた者が、咳ばらいをして歌いだした。

軍務を終えてコサックは、故郷の家に帰り行く、
肩に肩章、胸には勲章。

湿っぽい声が元気なく合唱しはじめたが、まもなく歌声はやんでしまった。イワン・アレクセエヴィチと並ん

で馬を進めていたザハール・コロリョフは、鐙の上に足を踏んばって立ち上がり、嘲るような調子でどなった。

「えい、きさまら、めくらの乞食め！　おれたちの歌う歌はそんなにしみったれたものなのか？　そんなものじゃ、教会でお布施を集めながら『ラザロ』を歌うのと変わりないじゃねえか。歌というやつはだな……」

「それじゃ、おまえがやってみろ！」

「あいつの首は短いんで、どこにも声をしまっておくところがねえんだ」

「いばりくさっとるけど、いまに尻尾を巻くんじゃねえのか？」

コロリョフは虱だらけのまっ黒なかたまりのような顎ひげをぎゅっと握りしめて、ちょっとのあいだ目をつぶり、それからはげしく手綱を振って最初の文句を歌いはじめた。

おい、それ、喜べ、勇者ドン・コサック……

中隊はあたかも彼の力強い歌声に目をさまされたみたいに、いっせいに大声をはりあげて歌いだした。

われらの名誉と栄光を！

そして歌声は、雨に濡れた林の上を、林のなかに切りひらいた小道の上を流れた。

おい、それ、みなに手本を示せ、
銃を構えて敵射つさまを！
軍規乱さず射ちまくれ。
命令だけをひたすら守れ。
隊長さんの命ずるままに
われらは進み、敵兵どもを、
斬って、突いて、射ちまくる！

《狼の墓場》から脱出できたことを喜びながら、全行程を歌いながら歩きつづけた。夕暮れ近くに汽車に乗りこんだ。軍用列車はプスコフへ向かって出発した。そして駅を三つ通過したあとになってはじめて、この中隊が第三騎兵軍団の他の諸部隊とともに、勃発した暴動を鎮圧するためにペトログラードに向かっているのだということを知った。この話を聞かされると、みなはぴたりと黙りこんでしまった。赤く塗った客車のなかには、眠気をもよおす静寂が長いこと支配していた。

「一難去ってまた一難か！」ひょろ長いボルシチョフが多くの者に共通する思いを口に出した。

二月以来ずっと中隊委員会議長を勤めているイワン・

アレクセエヴィチが、最初の停車駅で中隊長のところに行った。
「一等大尉殿、コサックたちがだいぶ動揺しておりますが」
一等大尉はイワン・アレクセエヴィチの顎にできた深いくぼみを長いことみつめていたが、それから微笑を浮かべながら言った。
「なあ、きみ、じつはおれだって動揺してるんだよ」
「どこにやられるのでしょうか？」
「ペトログラードだ」
「鎮圧にですか？」
「それとも、きみは騒ぎの応援に行くとでも思っているのかね？」
「わたしらはそのどちらもいやなのです」
「こちらの思っていることなど、まともにとりあげてはくれんのでな」
「コサックたちは……」
『コサックたちは』とはなんだ？」中隊長はすでに怒気をふくんでさえぎった。「コサックたちがなにを考えているかくらいはおれだって知っている。こんな任務がおれにとって愉快なものとでも思っているのか？　これを持って行って、みんなに読んでやれ。つぎの駅で、おれからもコサックたちに話すとしよう」
中隊長は折りたたんだ電報を手渡すと、顔をしかめ、嫌悪の表情をありありと浮かべて、罐詰の脂ぎったコンビーフの一片を噛みはじめた。
イワン・アレクセエヴィチは自分の車室にもどった。その手のなかには、まるで熱い燃えさしでも運ぶみたいにして電報が握られていた。
「ほかの車室のコサックたちを呼んできてくれ」
列車はすでに動きだしていたが、車室のなかにコサックたちがぞくぞくととびこんできた。およそ三十人ほども集まった。
「中隊長が電報を受けとったんだ。おれもざっと読んでみたが」
「それで、どんなことが書いてあったんだ？　読んでくれ！」
「さあ、読めよ、でたらめに読むなよ！」
「講和のことか？」
「黙ってろ！」
しんと静まり返ったなかで、イワン・アレクセエヴィチは最高司令官コルニーロフの檄を読み上げた。それから、ところどころに電文の打ちまちがえのある電報用紙が、汗ばんだ手から手へとまわされた。
『わたくし、最高司令官コルニーロフは、この祖国存亡の危機にさいし、兵士としての義務、自由ロシアの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

市民としての自己犠牲の精神ならびに祖国にたいするかぎりない愛の命ずるままに、臨時政府の命令に服従することなく、今後も陸海軍統帥権を掌握しつづけることを全国民の前に宣言する。この決意は各戦線のすべての司令官の支持を受けており、したがってわたくしは、最高司令官の任を解かれるよりも死を選ぶものであることを全ロシア国民に向かって宣言する。ロシア国民の真の息子は、つねに自己の職務に殉じ、自己の有する最大のもの、つまり自己の生命を祖国に捧げるものである。

勝ち誇る敵の破竹の進撃にたいして両首都が無防備同然の状態にあるという、この真に戦慄すべき祖国危急の時にあたって、臨時政府は祖国の真の独立という重大問題を忘れて、国民のなかに反革命の恐怖の幻想をまき散らしているが、しかし反革命の実現を促進しているのは、政府みずからの政治的無能力、自己の権力の基盤の弱さ、行動における不決断にほかならないのである。

わが国民の血を受けた息子であるわたくし、万人の面前で国民にたいする無限の奉仕に自己の全生涯を捧げてきたこのわたくしが、わが国民の偉大な未来の偉大な自由を守るために立ち上がらざるをえないのである。しかるに今日、この未来は無力にして意志のない者の手に握られている。おごれる敵は買収と裏切りの手段を弄してわがもの顔に振舞い、自由のみならず、ロシア国民の存在までをも破滅させようとしている。目をさませ、ロシアの人々よ、そして見よ、いままさに急速に転落しつつあるわが祖国を待ち受けている底知れぬ深淵を！

いっさいの動乱を避け、ロシア人同士が血を流し合う内乱を未然に防ぐために、いっさいの侮蔑と屈辱を忘れて、わたくしは全国民の面前で臨時政府に向かって言う、諸君の自由と安全とがわたくしのいつわりなき言葉によって保証されているわが本営に来たれ、そしてわたくしとともに、自由を確保しつつ、強大な自由の国民にふさわしい偉大な未来へとロシア国民を導くであろう国防体制を組織せよと。

コルニーロフ将軍』

そのつぎの駅で列車はとめられた。発車を待つあいだ、コサックたちはホームに降り、列車のそばに集まって、コルニーロフの電報と、ついさきほど中隊長が読みあげたばかりの、コルニーロフを裏切者で反革命ときめつけているケレンスキイの電報とをめぐって討議した。コサックたちはすっかり途方に暮れた面持ちで話し合っていた。中隊長も小隊付き将校も困惑しきっていた。

「頭のなかがすっかりこんがらかっちまったよ」マルチ

ン・シャミリがぼやいた。「どっちが悪いんだか、ちっともわかりやしねえ！」
「自分らが勝手に喧嘩し合っておきながら、軍隊にも喧嘩させようとしているのだ」
「お偉がたというのは、兵隊の苦労も知らずにうまいものを食って、それでいい気になっているんだ」
「みんな、自分がいちばん偉い者になりたいのさ」
「旦那の喧嘩で迷惑するのはいつもコサックだとよく言うじゃねえか」
「なにもかも急激に変わっちまうんで……困ったことだ！」
一群のコサックがイワン・アレクセエヴィチのところに来て要求した。
「中隊長のところに行って、どうしたらいいか聞いてきてくれよ」
コサックたちはひとかたまりになって中隊長のところに押しかけた。将校たちは自分たちの車室に集まってなにごとか協議していた。イワン・アレクセエヴィチが車室に入った。
「中隊長殿、これからどうしたらよいのか、コサックたちが知りたがっているのですが」
「よし、いま行く」
コサックたちは最後尾の車室のそばに集まって待っていた。中隊長はその群れのなかに割りこみ、中央に進み出て片手をあげた。
「われわれはケレンスキイに服従するのではなく、最高司令官と直属上官の命令に従う。いいな？　それだから、われわれはとやかく言わずに自分の上官の命令を守ってペトログラードに行かなければならない。少なくとも、ドゥノー駅まで行けば、第一ドン師団長から状況を説明してもらえるはずであるから、そうすれば事情もはっきりしてくると思う。あまり動揺しないように諸君にお願いする。とにかく、いまわれわれはきわめて重大な時期に直面しているのだ」
中隊長はさらに長々と、軍務や祖国や革命について語り、コサックたちの気持を落ちつかせようと努力し、いろいろな質問にたいしては確答を避けとおした。彼は目的を達し、そのあいだに列車には機関車が連結され（中隊の将校二人が武器を突きつけて駅長を脅し、発車を急がせたことをコサックたちは知らなかった）、そしてコサックたちはめいめい自分の車室に散って行ったのである。
軍用列車は一昼夜のあいだ走りつづけ、しだいにドゥノー駅に近づいて行った。深夜になって、ウスリイ部隊とダゲスタン連隊を乗せた列車をさきに通過させるために、ふたたび停車した。コサックたちの列車は待避線に

移された。そのそばの、オパール色の夜の闇のなかを、窓の明かりをちらつかせながらダゲスタン連隊の列車が通り過ぎて行った。咽喉にかかったふとい話し声、コーカサス地方独特の笛の音、耳慣れぬ歌のメロディが聞こえ、やがて遠ざかっていった。

中隊を乗せた列車が発車したのは、もう真夜中になってであった。馬力の弱い機関車は長いこと給水タンクのそばにとまったまま、罐の焚口から火花を地面に落としていた。機関士はたばこの火をちらつかせながら、なにかを待っているかのように、小窓から外をながめていた。機関車の近くの車両に乗っていた一人のコサックが、昇降口から顔を突き出してどなった。

「おい、ガヴリーラ、早くやってくれ、ぐずぐずしてると射つぞ！」

機関士はたばこをぺっと吐き出し、吸殻が弧をえがいて落ちてゆくのを目で追うようにして、しばらく黙っていたが、やがて咳ばらいをしながら言った。

「どうせ、みんなを残らず射ち殺せるわけでもあるまいに」そう言って、窓から顔を引っこめた。

それから数分後に、機関車は車両をぐいと引っぱり、緩衝器ががちゃりと鳴ったが、このときの衝動で平衡を失った馬どもがごとごとと蹄を鳴らした。列車は給水タンクのそばを通り、ときたま見える明かりのともった四角い窓のそばや、線路ぎわの暗い白樺の木立のそばを滑るように走り過ぎて行った。コサックたちは馬に飼料をやると眠りについたが、寝つかれなかった何人かのコサックは、扉が半分ほど開いている昇降口に出てたばこを吸い、威厳にみちた夜の空を見上げながら、それぞれの思いにふけるのだった。

イワン・アレクセエヴィチはコロリョフと並んで横になり、扉の隙間から見える、うしろへうしろへと流れ去ってゆく星の降るような夜空をながめていた。彼は、その日一日のあいだに起こった出来事を残らず思い浮かべてみて、中隊がこのままペトログラードに近づいてゆくのをなんとしてでも阻止しようとかたく決心し、横になったまま、どういう方法でコサックたちを自分の決意のほうに引きつけるか、どのようにして彼らに働きかけたらよいかと、いろいろと思いをめぐらしていた。

まだコルニーロフの檄文が出される以前から、彼は、コサックがコルニーロフと同じ道を進むべきではないとはっきり意識していたが、そうかといって、ケレンスキイを擁護するのもよくないと本能的な直観は彼に囁いていて、彼はさんざん頭を悩ませたあげく、とにかく中隊をペトログラードに行かせてはならぬ、もしいずれかと衝突しなければならなくなったとしたら、そのときはコルニーロフを相手にすべきである、それもケレンスキイ

を擁護するためではなく、また彼の政府に味方するためでもなく、そのあとにくるものを支持せんがためなのだと結論を下した。ケレンスキイのあとにくるものこそ、もっとも望ましい、真に自分たちの政権なのだと彼はかたく信じて疑わなかった。すでにこの夏、彼は中隊長とのあいだに起こったいざこざについて助言を得るために、中隊から派遣されてペトログラードの執行委員会軍事部に行ったことがあったが、そこで執行委員会の活動ぶりを自分の目で見、何人かのボリシェヴィキの同志たちとも話をしてみた結果、こう思ったのだった。『この骨格にわれわれ労働者の肉がつけば、それが政府となるのだ！　いいか、イワン、死んでもそれから離れるな、子供が母親の乳房にすがりつくみたいに、しっかりとそれにすがりついているのだぞ！』

この夜、馬衣の上に横になりながら、いつになくしばしば、これまでに経験したことのないようなはげしい大きな愛情をこめて彼が思い出したのは、このけわしい自己の道を探りあてるうえで彼に強い影響を与えた一人の男のことであった。明日、コサックたちに話さねばならぬことをいろいろと考えているうちに、シトックマンがコサックについて語っていた言葉も思い出したが、彼は、まるで釘を頭まですっかり打ち込むみたいにして、こんな言葉を何度となくくり返していたものである。『コサックはその本質においては保守的な存在だ。ボリシェヴィキの思想の正しさをコサックたちに納得させようとするときには、こういう事情を忘れないようにし、慎重に、じゅうぶんに考えたうえで行動し、その場の雰囲気をつかむようにしなければだめだ。はじめのうちは、きみやミシカ・コシェヴォイが最初ぼくにたいして抱いたのと同じような偏見を抱いてきみにたいしてくることだろうが、しかし、そんなことでがっかりしてしまってはいけない。ねばり強く、何度も何度もやってみるんだ、そうすれば、最後にはこちらが勝つのだ』

イワン・アレクセエヴィチは、コルニーロフと同じ道を歩むべきではないとコサックたちに説得しようとすれば、何人かの者からは反対されるだろうと覚悟していたが、ところが翌朝、自分の車室で、同胞と戦うためにペトログラードに行くのではなくて、戦線にもどることを要求すべきであると用心深く言いだしてみると、コサックたちは一も二もなく同意し、このままペトログラードに接近することを拒否しようと重大な覚悟をもって決議したのだった。ザハール・コロリョフとチェルヌイシェフスカヤ村出身のコサック、トゥリーリンとは、もっとも心の許せるイワン・アレクセエヴィチの同志であった。彼らは一日じゅう車室から車室へと移ってコサックたちと話し合ったが、夕方近く、ある小さな駅にさしかかっ

て、列車が速度をゆるめたとき、イワン・アレクセエヴィチのいた車室に第三小隊の下士官ブシェニーチニコフがとびこんできた。
「中隊はこのつぎの駅で下車する！」彼はイワン・アレクセエヴィチに向かって興奮してどなった。「コサックたちの気持もわからないで、なにが委員会議長だ？　おれたちをばかにしないでくれ！　もうこれ以上、この汽車に乗っていくのはいやだ！……将校のやつらがおれたちの首を締めようとしているのに、おまえはなにひとつ行動を起こそうとしない。こんなことをしてもらうためにおれたちがおまえを選んだとでも思っているのか？　おい、なにを笑っているんだ？」
「そう言ってくるのをずっと待っていたんだ」イワン・アレクセエヴィチは微笑を浮かべながら言った。
列車がとまると、彼はまっさきに車室をとびだした。トゥリーリンといっしょに駅長のところに行った。
「このさき、汽車をもう行かせないでくれ。おれたちはここで降りるから」
「それはどういうことです？」駅長はうろたえてたずねた。「わたしの受けている命令は……許可証は……」
「つべこべ言うな！」トゥリーリンがきびしく彼をさえぎった。
二人は駅委員会の委員を探しだし、ふとった赤毛の電信技師の議長に事情を説明し、それから数分たつと、機関士がみずから進んで列車を引込線に入れてしまった。
コサックたちは大急ぎで板をかけわたすと、車両から馬を引きおろしはじめた。イワン・アレクセエヴィチは長い両足を踏んばり、微笑をたたえた浅黒い顔の汗を拭いながら、機関車のそばに立っていた。中隊長が顔をまっ青にして彼のところに駆けつけてきた。
「なにをしてるんだ？……おまえだって知っているはずだろう……」
「知っているとも！」イワン・アレクセエヴィチは相手をさえぎって言った。「だがなあ、一等大尉君、おとなしくしといてもらおう」そしてまっ青になり、鼻の孔をひくひく震わせながら、きっぱりと言いきった。「もう、いいかげんどなりあきただろう、若造！　これからは、あんたの命令をおれたちは聞かない。わかったな！」
「コルニーロフ最高司令官は……」一等大尉は顔をまっ赤にして、口ごもりながら言いかけたが、しかしイワン・アレクセエヴィチは、もろい砂に深くめりこんでいる履き古した自分の長靴に目をやりながら、これでやっと肩の荷をおろせたというように片手を振って忠告した。
「あいつを十字架がわりに首にぶら下げているがいいや、ところがおれたちには、あんなやつなんかに用はねえんだ」

一等大尉はくるりと踵を返して、自分の車室のほうに駆けだして行った。

一時間ほどたって、中隊は、将校こそ一人もいなかったとはいえ、それでも完全な戦闘隊形をとって、南西の方向を目ざして駅を出発した。先頭の小隊には、中隊の指揮をとることになったイワン・アレクセエヴィチと彼の補佐を勤める背の低いトゥリーリンとが機関銃兵たちと並んで馬を進めていた。

かつての中隊長から取り上げた地図を頼りに、中隊はどうにかこうにか方角を定めながらゴレーロエ村までたどり着き、そこで野営をすることにした。全体会議によって、戦線に引き返すこと、阻止されるような事態が起こった場合には武器を取って戦うことが決議された。

馬の足を縛り、歩哨を立てると、コサックたちは夜を明かすために横になった。火は焚かなかった。大部分の者が打ちひしがれたような気分になっているらしく、いつものように雑談したり、冗談をかわしたりもせず、おたがいに自分の考えを胸に秘めたまま横になっていた。

『もし連中が思い直して、謝って出ようなどと言いだしたらどうしたらよいだろう？』イワン・アレクセエヴィチは外套をひっかぶりながら、いささか不安になってそう考えた。

すると、まるでその考えを立ち聞きしていたかのように、トゥリーリンが歩み寄ってきた。

「もう寝たのか、イワン？」

「いや、まだだ」

トゥリーリンは彼の足もとにしゃがみこみ、たばこの火をちらつかせながら、囁くように言った。

「コサックたちは迷っている……思い切った行動に出てはみたものの、すぐにまた、こわくなってきたんだ。どうも面倒なことになってしまったけど……おまえ、どう思う？」

「そのうちにわかるさ」イワン・アレクセエヴィチは落ちつきはらって答えた。「おまえもこわがっているんじゃないのか？」

トゥリーリンは帽子の下のうなじをかきながらひきつったような笑いをもらした。

「じつを言うと、おっかねえんだ……最初やりはじめたときにはなんでもなかったのだが、いまになってみると、恐ろしくて、ぞっとするんだ」

「あとのたたりがこわくて、弱気になったというわけか」

「なにしろ、敵は手ごわいやつだぞ、イワン」

二人は長いこと黙りこんでいた。村の明かりはすでに消えていた。水をたたえた沼地と化し、はてしない入江のように広がる柳の生い茂った草原のあたりから野鴨の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb